

香川大学における TOEIC テストの分析 (2005-2006 年度) Data analysis of TOEIC test at Kagawa University: 2005-2006

長井克己(大学教育開発センター)

1. はじめに

1.1. 本学における TOEIC テストの実施根拠

既習外国語新カリキュラムの実施に伴い、本学では1年生のほぼ全員が TOEIC-IP テスト(以下 TOEIC という)を受験している。これは 1 年次必修科目の「英語コミュニケーション基礎演習(前期)」「同 総合演習(後期)」において TOEIC の受験が義務化されているためである。両科目は 2005 年度カリキュラムの中心となるもので、前年度まで教官ごとに異なっていたシラバスを統一し、全学共通の教育目標を掲げてスタートしたものである。後期科目「総合演習」の場合、達成目標に「後期終了時に、全学平均で TOEIC470点程度を獲得できる実力をつける」と明記され、授業の概要で「前期に受験した TOEIC-IP 試験の結果を各人が 50 点以上引き上げることを目標にし」と謳っている。両科目の「真の目標」は学生の英語力向上そのものであり、TOEIC は手段に過ぎないとの意見もあり、上記のような達成目標の導入や使用教科書を TOEIC の問題集に統一する際には、さまざまな議論があったようである(永尾 2003, 松島 2006)。しかし、「真の目標」がシラバスの「授業の目的・達成目標」に明記されないのは外部評価が重視される現在の高等教育機関においては通用せず、また、それが「学生の英語力向上」である場合は、当然その証明が求められる。到達度を客観的かつ判断的に評価する手段として TOEIC 等の外部評価を利用することは、内部でそのテストが開発できない場合は不可避であると言わざるを得ない。

なお、本稿では現行のカリキュラムにおいて TOEIC を受験する学生のみを議論の対象とするため、教育学部における初習外国語のみの履修者や医学部医学科の学生については論じることができない。医学部医学科では幸町キャンパスで新カリキュラムが導入された 2005 年度以前から、別のカリキュラムに従い全員 TOEIC を受験し効果を上げている(芝田 2001)。

1.2. 本学における TOEIC の実施体制

現行カリキュラムに基づき幸町キャンパスで行われる TOEIC は、2006 年 3 月に発足した香川大学 TOEIC 運営委員会が実施主体となっている。委員長は大学教育開発センターの外国語教育部長であるが、その他のメンバーは実施責任者のセンター教員 1 名、「委員長が必要と認め」るがセンター組織の役割分担の制約から共通教育実施の意志決定に関与できない英語小部会長 1 名、及び大学教育開発センター職員で構成される。この委員会は振替口座開設を始めとする対外交渉の必要上設置されたものであるため、2006 年度の開催は 1 回のみである。長期的視野に立った TOEIC の有効利用に関しての合意形成を図るには、その運営委員会がより頻度を上げて活動するのが望ましいことは言うまでもないが、大学教育開発センター専任の英語教官は僅か 2 名で、幸町担当の 1 名が TOEIC 実施の雑務に忙殺されている現実では、TOEIC 運営委員会に多くを求めることは無理であろう。近辺の国立大学に比べ、学生数あたりの英語教官が 6 名不足していることを永尾(2003, p.59)が指摘してから 3 年が経過しているが、開講科目の 8 割を非常勤講師に頼り、自転車操業状態の外国語教育部の状態は改善されていない。

このような状況での TOEIC 運営委員会の業務は、シラバスに従い学生に TOEIC を受験させ、スコアを担当教官に通知することに限られる。具体的には、学生や担当教官への連絡、受験者数の確定と試験室・座席割り振り、当日受験できない学生への対応等を行うこととなる。一方、実際の実施にかかる業務は香川大学の生活協同組合(以下「生協」という)との委託契約に基づいて行われる。TOEIC 運営委員会が作成した実施計画に基づき、実施に関する要領等を作成して TOEIC を実施することとなっている。具体的には、受験料の徴収・管理・納入や、資料の仕分け・保管・返送、監督やアルバイトの手配、スコアの発送等を行う。このような業務委託契約による分担は 2005 年度に TOEIC テストが開始された後に整備されてきたものであるため、固定化せず試行錯誤を重ねながら改良していくことが望ましい。広島大・鳥取大・徳島大等のように実施業務を生協や業者に一括して委託する(岡山大 2006)ことも選択肢の一つであると考えられる。

2. TOEIC テストの分析

2.1. 各学部の実態とその入学年度別比較、並びに学外大学生との比較

表 1 に 2005 年 7 月、同 12 月、及び 2006 年 6 月に実施された TOEIC-IP テストの全学(医学科を除く)及び学部別平均点、標準偏差、及び得点分布(該当学生数)を示す。表 1 には代替試験となった生協主催のカレッジ TOEIC を受験した学生の成績は含まれていない。また、医学部看護学科のカリキュラムは「基礎演習」2 単位

のみであるため、2005 年 12 月の試験を受験していない。

表 1 TOEIC テスト平均点・偏差・得点別人数分布 (2005 年 7 月・同 12 月・2006 年 6 月)

2005年7月				2005年12月				2006年6月			
全学部	受験者数	total	listening reading	全学部	受験者数	total	listening reading	全学部	受験者数	total	listening reading
平均	380	1134	1134	平均	408	1051	1051 1134	平均	397	1118	1118 1118
標準偏差	90	48	54	標準偏差	104	62	54	標準偏差	93	53	52
600-	6	57	10 300-	600-	34	173	10 300-	600-	22	117	6 300-
550-595	26	73	5 280-295	550-595	69	117	5 280-295	550-595	43	93	16 280-295
500-545	81	103	31 260-275	500-545	111	105	31 260-275	500-545	96	93	21 260-275
450-495	155	128	55 240-255	450-495	156	121	55 240-255	450-495	180	148	90 240-255
400-445	202	155	73 220-235	400-445	194	141	73 220-235	400-445	200	162	77 220-235
350-395	239	246	135 200-215	350-395	183	116	135 200-215	350-395	224	151	152 200-215
300-345	229	138	125 180-195	300-345	152	94	125 180-195	300-345	200	170	115 180-195
250-295	121	131	174 160-175	250-295	96	85	174 160-175	250-295	98	89	194 160-175
200-245	59	45	155 140-155	200-245	41	40	155 140-155	200-245	47	49	131 140-155
150-195	15	38	148 120-135	150-195	10	29	148 120-135	150-195	8	32	121 120-135
-145	1	20	223 -115	-145	5	30	223 -115	-145	0	14	195 -115
(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)
教育 受験者数	195	195	195	教育 受験者数	192	192	195	教育 受験者数	195	195	195
平均	407	232	176	平均	434	251	176	平均	427	242	186
標準偏差	93	50	52	標準偏差	103	62	52	標準偏差	95	55	51
600-	4	15	4 300-	600-	12	47	4 300-	600-	6	30	3 300-
550-595	8	19	2 280-295	550-595	15	22	2 280-295	550-595	15	19	4 280-295
500-545	17	26	5 260-275	500-545	25	16	5 260-275	500-545	24	19	5 260-275
450-495	34	22	13 240-255	450-495	30	24	13 240-255	450-495	37	35	21 240-255
400-445	38	30	17 220-235	400-445	37	25	17 220-235	400-445	42	27	24 220-235
350-395	41	37	23 200-215	350-395	35	18	23 200-215	350-395	23	17	31 200-215
300-345	31	22	25 180-195	300-345	16	15	25 180-195	300-345	36	23	21 180-195
250-295	17	14	29 160-175	250-295	19	13	29 160-175	250-295	10	17	25 160-175
200-245	4	5	27 140-155	200-245	3	7	27 140-155	200-245	2	7	20 140-155
150-195	1	4	27 120-135	150-195	0	4	27 120-135	150-195	0	1	21 120-135
-145	0	1	23 -115	-145	0	1	23 -115	-145	0	0	20 -115
(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)
法 受験者数	155	155	155	法 受験者数	153	153	155	法 受験者数	158	158	158
平均	423	235	188	平均	460	262	188	平均	452	255	197
標準偏差	92	51	54	標準偏差	101	64	54	標準偏差	86	52	48
600-	2	17	2 300-	600-	10	45	2 300-	600-	9	37	2 300-
550-595	10	17	2 280-295	550-595	25	27	2 280-295	550-595	14	23	7 280-295
500-545	18	19	13 260-275	500-545	21	16	13 260-275	500-545	24	10	7 260-275
450-495	32	20	12 240-255	450-495	32	14	12 240-255	450-495	39	26	25 240-255
400-445	35	20	14 220-235	400-445	27	13	14 220-235	400-445	28	18	9 220-235
350-395	27	28	29 200-215	350-395	11	14	29 200-215	350-395	25	23	32 200-215
300-345	21	13	17 180-195	300-345	19	8	17 180-195	300-345	16	13	15 180-195
250-295	4	14	23 160-175	250-295	6	7	23 160-175	250-295	3	2	27 160-175
200-245	6	3	20 140-155	200-245	1	5	20 140-155	200-245	0	5	18 140-155
150-195	0	2	6 120-135	150-195	0	3	6 120-135	150-195	0	1	9 120-135
-145	0	2	17 -115	-145	1	1	17 -115	-145	0	0	7 -115
(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)
経済 受験者数	293	293	293	経済 受験者数	282	282	293	経済 受験者数	280	280	280
平均	400	223	176	平均	429	246	176	平均	409	229	179
標準偏差	81	45	51	標準偏差	95	57	51	標準偏差	86	47	51
600-	0	14	2 300-	600-	8	42	2 300-	600-	6	23	0 300-
550-595	5	23	1 280-295	550-595	21	45	1 280-295	550-595	5	23	5 280-295
500-545	30	28	10 260-275	500-545	43	40	10 260-275	500-545	27	30	8 260-275
450-495	52	42	22 240-255	450-495	49	33	22 240-255	450-495	56	39	27 240-255
400-445	64	43	26 220-235	400-445	63	43	26 220-235	400-445	60	52	26 220-235
350-395	70	69	46 200-215	350-395	42	32	46 200-215	350-395	59	39	43 200-215
300-345	43	36	40 180-195	300-345	33	15	40 180-195	300-345	41	42	29 180-195
250-295	17	20	50 160-175	250-295	14	15	50 160-175	250-295	16	20	58 160-175
200-245	9	6	32 140-155	200-245	5	6	32 140-155	200-245	8	6	29 140-155
150-195	3	9	30 120-135	150-195	2	3	30 120-135	150-195	2	3	18 120-135
-145	0	3	34 -115	-145	2	8	34 -115	-145	0	3	37 -115
(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)
看護 受験者数	59	59	59	看護 受験者数	61	61	61	看護 受験者数	61	61	61
平均	378	216	162	平均	366	206	159	平均	366	206	159
標準偏差	79	38	54	標準偏差	87	50	47	標準偏差	87	50	47
600-	0	1	2 300-	600-	0	4	0 300-	600-	0	4	0 300-
550-595	1	2	0 280-295	550-595	4	2	0 280-295	550-595	4	2	0 280-295
500-545	5	8	0 260-275	500-545	2	3	1 260-275	500-545	2	3	1 260-275
450-495	7	6	1 240-255	450-495	2	6	4 240-255	450-495	2	6	4 240-255
400-445	10	8	3 220-235	400-445	12	10	3 220-235	400-445	12	10	3 220-235
350-395	13	20	8 200-215	350-395	12	6	6 200-215	350-395	12	6	6 200-215
300-345	14	3	7 180-195	300-345	14	11	4 180-195	300-345	14	11	4 180-195
250-295	8	8	12 160-175	250-295	12	10	12 160-175	250-295	12	10	12 160-175
200-245	1	2	6 140-155	200-245	3	5	13 140-155	200-245	3	5	13 140-155
150-195	0	1	7 120-135	150-195	0	3	6 120-135	150-195	0	3	6 120-135
-145	0	0	13 -115	-145	0	1	12 -115	-145	0	1	12 -115
(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)
工 受験者数	267	267	267	工 受験者数	262	262	267	工 受験者数	265	265	265
平均	326	194	133	平均	348	207	133	平均	341	200	140
標準偏差	72	42	45	標準偏差	87	56	45	標準偏差	79	48	43
600-	0	1	0 300-	600-	1	18	0 300-	600-	0	10	0 300-
550-595	0	5	0 280-295	550-595	3	8	0 280-295	550-595	2	10	0 280-295
500-545	3	9	0 260-275	500-545	11	19	0 260-275	500-545	8	13	0 260-275
450-495	12	21	3 240-255	450-495	23	27	3 240-255	450-495	16	23	7 240-255
400-445	23	34	5 220-235	400-445	32	33	5 220-235	400-445	31	34	3 220-235
350-395	62	60	12 200-215	350-395	58	32	12 200-215	350-395	64	43	21 200-215
300-345	80	43	21 180-195	300-345	62	40	21 180-195	300-345	63	50	23 180-195
250-295	48	49	36 160-175	250-295	42	42	36 160-175	250-295	46	28	37 160-175
200-245	30	22	43 140-155	200-245	25	16	43 140-155	200-245	30	23	33 140-155
150-195	8	13	52 120-135	150-195	5	15	52 120-135	150-195	5	22	48 120-135
-145	1	10	95 -115	-145	0	12	95 -115	-145	0	9	93 -115
(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)
農 受験者数	165	165	165	農 受験者数	162	162	165	農 受験者数	159	159	159
平均	361	209	152	平均	390	231	152	平均	393	228	164
標準偏差	84	48	48	標準偏差	96	60	48	標準偏差	80	47	46
600-	0	9	0 300-	600-	3	21	0 300-	600-	1	13	1 300-
550-595	2	7	0 280-295	550-595	5	15	0 280-295	550-595	3	16	0 280-295
500-545	8	13	3 260-275	500-545	11	14	3 260-275	500-545	11	18	0 260-275
450-495	18	17	4 240-255	450-495	22	23	4 240-255	450-495	30	19	6 240-255
400-445	32	20	8 220-235	400-445	35	27	8 220-235	400-445	27	21	12 220-235
350-395	26	32	17 200-215	350-395	37	20	17 200-215	350-395	41	23	19 200-215
300-345	40	21	15 180-195	300-345	22	16	15 180-195	300-345	30	31	23 180-195
250-295	27	26	24 160-175	250-295	15	8	24 160-175	250-295	11	12	35 160-175
200-245	9	7	27 140-155	200-245	7	6	27 140-155	200-245	4	3	18 140-155
150-195	3	9	26 120-135	150-195	3	4	26 120-135	150-195	1	2	19 120-135
-145	0	4	41 -115	-145	2	8	41 -115	-145	0	1	26 -115
(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)	(total)			(listening/reading)

表 1 の平均点を学部別にグラフにしたものが図 1, 図 2, 図 3 である。飛び値はなく、得点調整によるなだらかな分布が期待されるので、一元配置の分散分析を行ってみた。学部間の効果が 3 回とも有意であったので Scheffe 法による多重比較を行い、5% の有意差が現れた学部間の関係を表 2 に示す。3 回の試験を通して平均点だけを見れば、法・教育・経済学部が平均点が高く、工学部が低いという傾向が見てとれる。

同時期に全国で行われた IP テストの点数を図 4 に掲げる(ETS 2006, p.8)。図 4 の大学 1 年生の平均点は 401 点であり、本学の全学部の平均に近い値となっている。また、図 4 の 1 年から 4 年の平均は 435 点であり、同じく 2005 年度に公開会場で行われた TOEIC の、大学生による平均点 542 点(受験者数 156,365)(ETS 2006, p.8)に比べて 100 点以上低い点となっている。本学学生のデータを外部の平均点データと比較する際には、外部のデータが IP テストによるものか、あるいは公開テストによるものかに、まず注意すべきであろう。言うまでもなく、自ら公開テストを受験する学生たちは、やる気と実力のある学生のみ偏った母集団である。

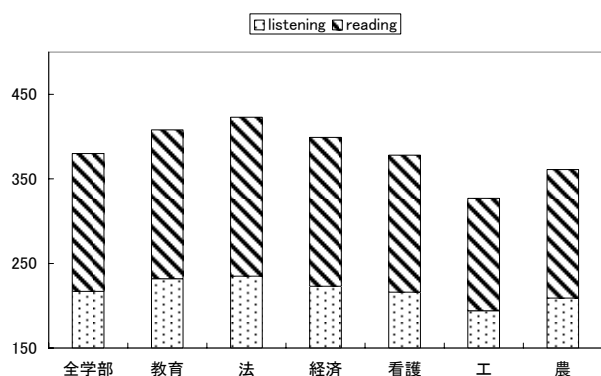


図 1 2005 年 7 月の学部別平均スコア

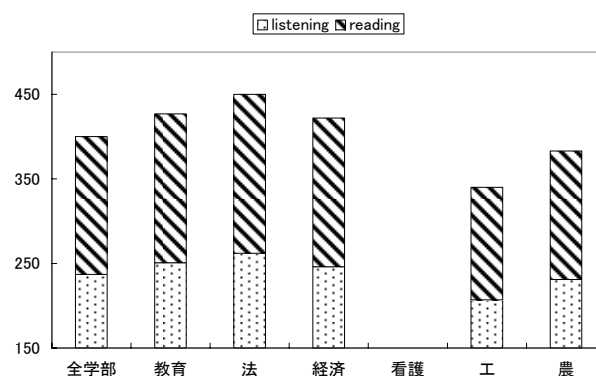


図 2 2005 年 12 月の学部別平均スコア

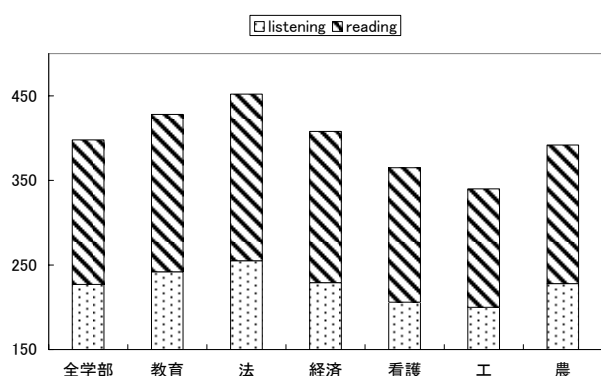


図 3 2006 年 6 月の学部別平均スコア

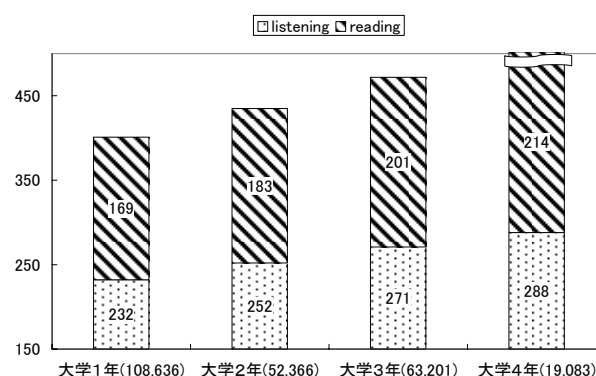


図 4 2005 年度全国 IP テストデータ

	教育	法	経済	看護	工	農
教育						
法						
経済		%*				
看護	*	**	*			
工	#%*	#%*	#%*	#		
農	#%*	#%*	#%		#%*	

(legends: # = 2005年7月, % = 2005年12月, * = 2006年6月)

表 2 各学部平均点間に見られる得点差 (*=<.05)

次に図 5 から図 10 に 2005 年 7 月の受験生と 2006 年 6 月の受験生との比較を示す。学部毎に学生数が異なるため、縦軸は全員に対する割合(%)に換算した。図 5 により 2005 年度の 1 年生よりも 2006 年度の 1 年生の方がやや成績が良好であることが分かる。特に図 6 は教育学部のスコアであるが、2006 年 6 月の分布が二つの山を作っている。データ処理やシラバスデザインの際に注意が必要であり、程度により上記の分散分析の妥当性にも部分的に関わる問題である。このようなデータを毎年蓄積し、その傾向を分析することも大切であると考えられる。

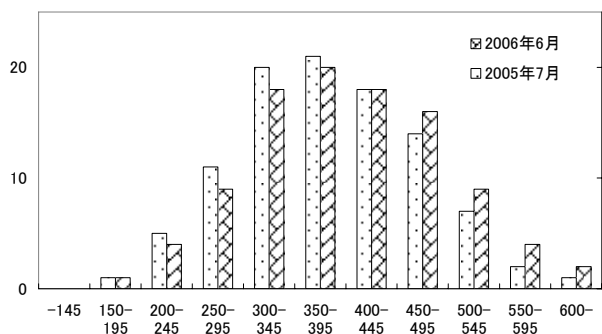


図 5 全学部1年生のスコア分布割合の比較(2005年と2006年・医学部を除く)

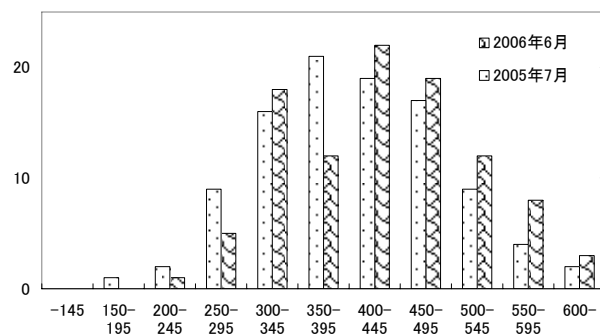


図 6 教育学部1年生のスコア分布割合比較(2005年と2006年)

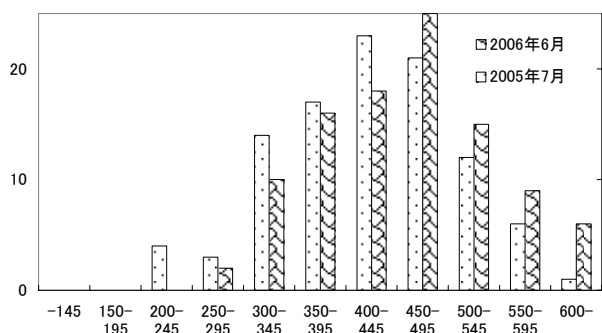


図 7 法学部1年生のスコア分布割合比較(2005年と2006年)

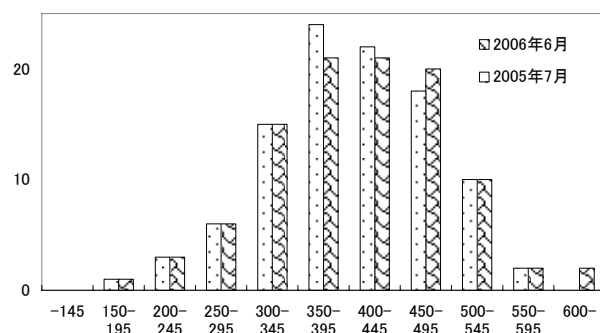


図 8 経済学部1年生のスコア分布割合比較(2005年と2006年)

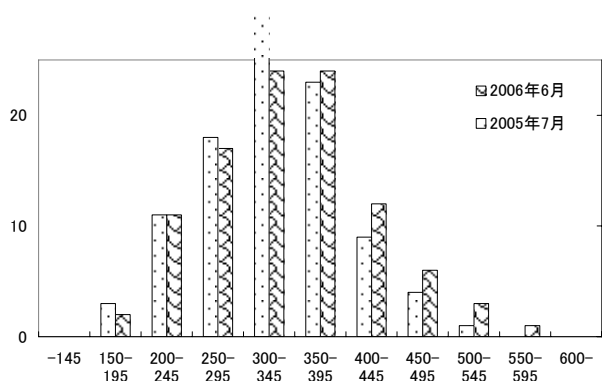


図 9 工学部1年生のスコア分布割合比較(2005年と2006年)

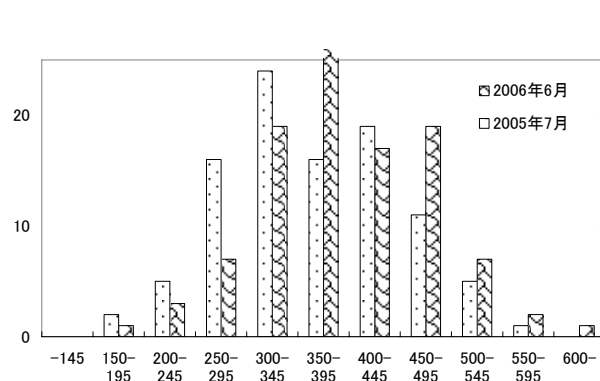


図 10 農学部1年生のスコア分布割合比較(2005年と2006年)

2.2. 新カリキュラム導入により学生の英語力は向上したのか

結論から述べれば、この問いに対する答えは「それは検証不能です」である。2005 年度より始まった新カリキュラムの効果を調べるためには、2004 年度までのデータとの比較が必要である。しかし、そのデータが存在しないのである。2005 年 7 月のデータと 12 月のデータを比較することは可能であるが、たとえ 7 月よりも 12 月の点数が有意に高いことが証明できたとしても、同程度の得点上昇が旧カリキュラムでは得られないことを証明しない限り、新カリキュラムの導入により学生の英語力が向上したとは結論できない。旧カリキュラムのまま、即ち、各教官が個別の教科書とシラバスで指導しつつ TOEIC を年 2 回受験した場合でも、新カリキュラムの学生よりも英語力が向上する可能性は十分にある。新カリキュラムの 1 年生は年 2 回 TOEIC の受験を義務づけられており、受験しないと原則として必修科目の単位が与えられない。TOEIC 以外で英語を勉強するという選択肢は無く、究極の動機づけになっている。それ以外にも学生の TOEIC スコアに影響を与えていると考えられる事項は多く、表 3 に列挙する。600 点以上の TOEIC 高得点者に「特別点加算」として、シバラスに記載された成績評価基準

の割合(20 点分)を超える 30 点を与えている現状は、100 点満点の学生と 110 点満点の学生の混在を意味しており、外部認証機関が成績評価方法を審査する際に問題視される可能性もある。いずれにせよこのような状況で TOEIC のスコアが上がるのは当然と考えるべきで、むしろ旧カリキュラムの廃止により何が失われたのかを検討すべき時なのかもしれない。

1. 受験しないと単位が与えられない
2. 達成目標が「前期終了時に 400 点」「後期終了時に 470 点」程度
3. TOEIC 対策問題集が全学共通の教科書
4. 毎週行われる教科書の内容に関する小テスト
5. スコアを成績に算入する
6. 高得点者には「特別点加算」を与える
7. 受験料は入学後個人で振り込み

表 3 新カリキュラム学生の TOEIC に対するインセンティブ(旧カリキュラム学生には無かったもの)

図 11 から図 16 は同一の集団による 2005 年 7 月と 12 月のスコアの比較である。全学部では図 11 のようになだらかな分布を示し、かつ、TOEIC 対策の授業の効果が出ていることが観察される。同様の傾向は経済、工、農の各学部でも見られる(図 14, 図 15, 図 16)が、教育と法学部では 12 月のスコア分布が、ややいびつな形になっている(図 12, 図 13)。特に法学部は全学で最も平均点が高い学部であるが、12 月になって大きくスコアを伸ばしたグループと、300～345 程度で低迷するグループの両方が存在する。

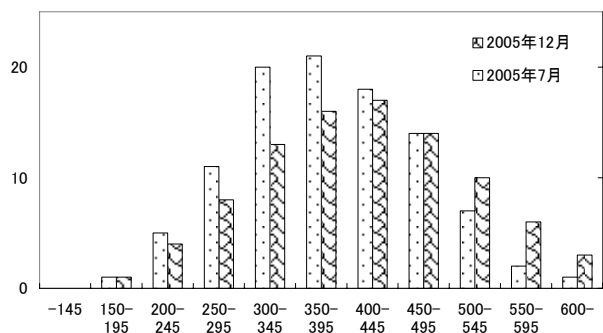


図 11 全学部 2005 年度 1 年生のスコア分布割合の比較(7 月と 12 月・医学部を除く)

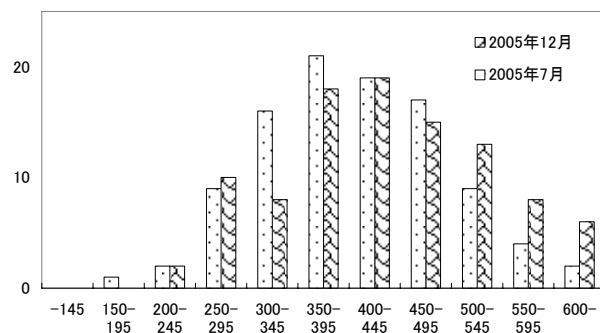


図 12 教育学部 2005 年度 1 年生のスコア分布割合の比較(7 月と 12 月)

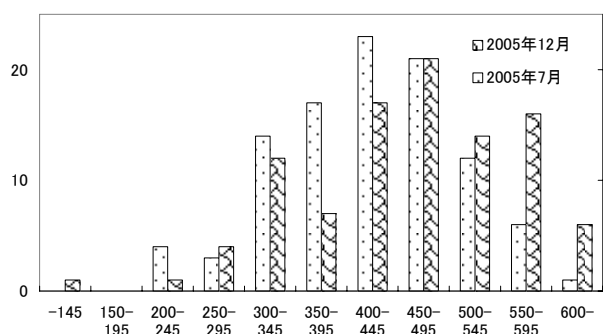


図 13 法学部 2005 年度 1 年生のスコア分布割合の比較(7 月と 12 月)

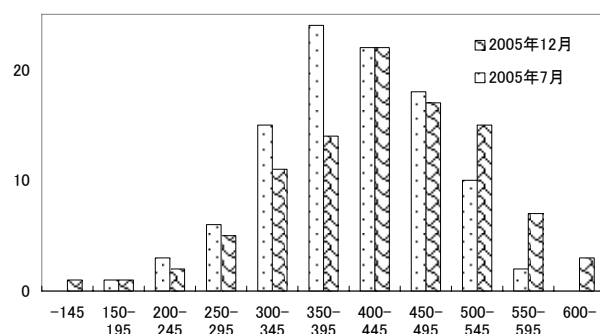


図 14 経済学部 2005 年度 1 年生のスコア分布割合の比較(7 月と 12 月)

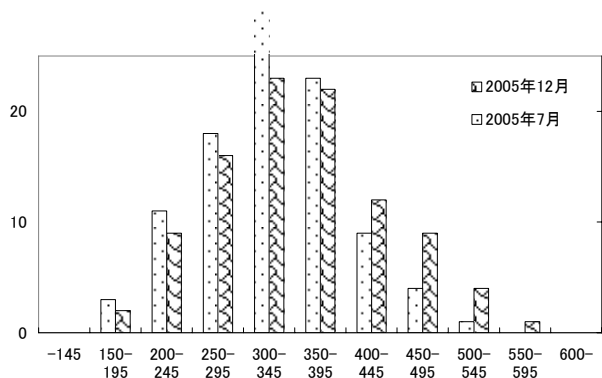


図 15 工学部 2005 年度 1 年生のスコア分布割合比較(7 月と 12 月)

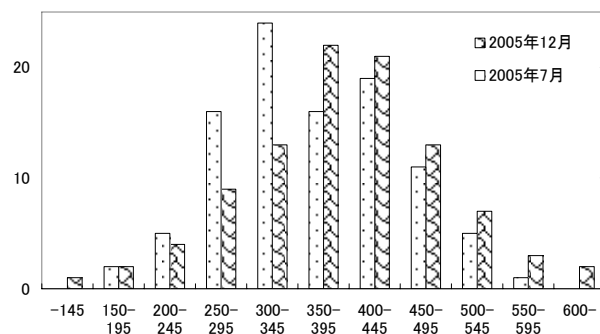


図 16 農学部 2005 年度 1 年生のスコア分布割合比較(7 月と 12 月)

同一受験者が複数回 TOEIC を受験した場合、何点以上スコアが上昇すれば有意な差、即ち学習の効果があったと判断できるかについては、さまざまな要因を考慮した上での判断が必要である。TOEIC の「評価の基準は常に一定であり、受験者の能力に変化がない限りスコアも一定に保たれます」(IIBC 2006a)というのが日本の代理店の売り文句であり、受験回ごと、即ち問題のバージョン間の難易差を日本では認めていない。しかし人間の作るテストであるから、そのような理想的な問題を作ることは不可能である。項目分析を行い弁別力の弱い問題(殆ど全員が正答してしまう枝間等)を採点から外したり、分布の平滑化を行っても、どうしても問題の難易差は残るはずである。図 17 の横軸は 2005 年度に行われた公開 TOEIC の回数、縦軸はその平均点を示しているが、受験回によってかなりの差があることが分かる(IIBC 2006b)。さすがに本国の ETS は“differences in TOEIC test scores across administrations” (ETS 1998, p.IV-4)としてその存在を認めている。

ETS では問題のバージョンによるスコアの揺れは、全て受験者の責任だという立場を取る。即ち、受験者がばらばらとしているせいだと言うのである。これは測定の標準誤差(standard error of measurement)であり、リスニングとリーディングのそれぞれで 25 点だと公表している(ETS 1998, p.IV-4)。よってリスニングとリーディングの合計では 50 点が誤差範囲となる。前期に初めて TOEIC を受け、例えば 300 点だった学生は、自分の本当のスコアは 250-350 あたりだ、と考えればよい。そのような範囲が生じるのは、ETS は学生の集中力が足りなかったからだと言うが、実際には 3 回に 1 回(33%)程度で現れる「難しい問題」にたまたま当たった可能性も高い。95%の確率で本当のスコアを推定するには誤差を 2 倍(2SE)し、リスニングとリーディングの合計で 100 点の誤差を認める必要があるが、これでは幅が広すぎる。この測定の標準誤差は得点分布の山のあたりで最大になっており、リスニングの場合 200~300 点あたりでは 28~29 点に上昇する(ETS 1998, p.IV-6)。

一方、それぞれ測定の標準誤差を持った 2 回の TOEIC でのスコア差は、差の標準誤差(standard error of difference)である。これは 2 回の測定の標準誤差の平方和の平方根なので、リスニングとリーディングのそれぞれで約 35 点となる(ETS 1998:VI-3)。棄却域を半分に狭め 70 点差を設定すれば、95%の信頼度で区別ができるのは測定の標準誤差の場合と同じである。前期と後期のスコアや 2 人の学生を比較する際にはこちらを使うべきであろう。例えば 2005 年 7 月のリスニングとリーディングの合計スコアが 300 点、12 月では 370 点だった学生は 67%程度の確率で英語力が伸びたと言える。140 点のスコア差がある二人の学生は、英語力に差があると判断して差し支えない(5%水準)。

一人の学生の 7 月と 12 月のスコアの比較(被験者内要因の反復測定、測定標準誤差大)、二人の学生の 7 月のスコアの比較(被験者間の検定、測定標準誤差小)、二人の学生の 7 月と 12 月のスコアの比較(被験者間の検定、測定標準誤差大)を区別しないことに不安が残るが、安全な結論はスコアの幅が広くなり、結局はどこで妥協するかと言う問題になる。そうであれば「えいやっ」と、キリの良い誤差範囲の基準を作ってしまうのも一つの考え方である。日本の TOEIC 運営委員会ではそれを、リスニングとリーディングのそれぞれで 25 点に設定しており(IIBC, personal communication. 31 July 2006)、測定の標準誤差と同じである。理論的にやや疑問は残るが、広く使われているようなのでこの基準で 2005 年度 7 月と 12 月のスコアを比較してみたのが図 18 である。この図の縦軸は各学部の TOEIC 受験者数(7 月と 12 月の両方を受験した学生数)に対する、リスニングとリーディングの合計点で 50 点以上、100 点以上(差の標準誤差の基準も満たす)、150 点以上(同)の上昇を果たした学生数の割合を示している。図 18 で最も注目すべきは工学部学生のグラフであろう。図 2 や表 2 で最下位に甘んじていた工学部であるが、学生の努力は他学部と比べてさほど遜色がないことが分かる。

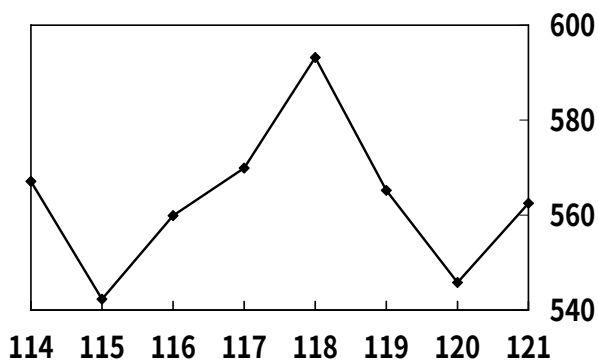


図 17 TOEIC 公開テストの平均点

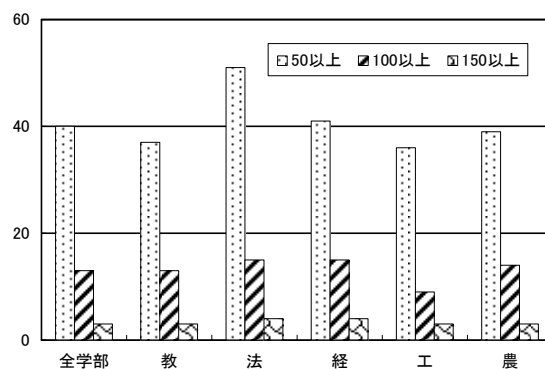


図 18 2005 年 7 月比の 12 月のスコアの伸び(割合)

3. 2年生へのアンケート調査

2005 年度より全学に導入した TOEIC についての学生の意見を聞くため、2006 年 10 月に医学部を除く 2 年生全員を対象にアンケート調査を実施した。記入不備なものを除いたデータ数は 742 で、81.6%の回収率であった。図 19 から図 35 にその結果を示す。データは全て、学部毎の回答者数全体への比率を示している。

図 19 から明らかなように、多くの学生は TOEIC が英語の学習に役立つものと考えている。図 20 と図 21 から、2005 年度に使用した共通の教科書は、さほど難しいとは思われていなかったことが伺えるが、図 22 が示すように、大多数の学生は教科書以外には何もなかったようである。

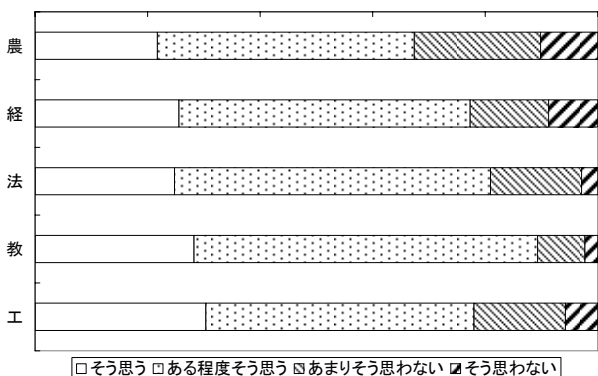


図 19 TOEIC テストは英語の学習に役立つと思いますか

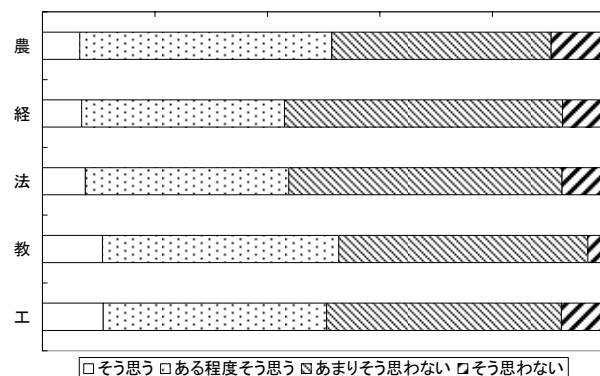


図 20 1 年前期に授業で使用した教科書 (TOEIC 問題集) は難しかったですか

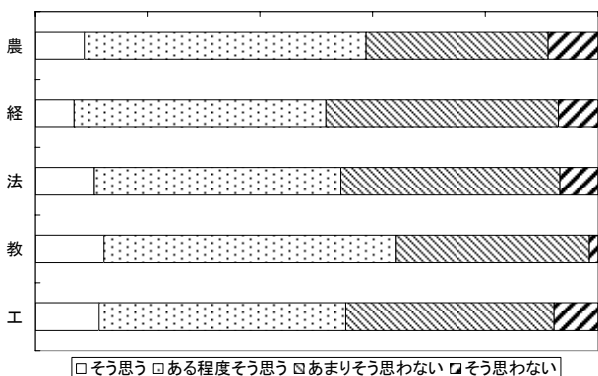


図 21 1 年後期に授業で使用した教科書 (TOEIC 問題集) は難しかったですか



図 22 TOEIC 対策用に教科書以外で勉強をした人はそれを教えてください

図 23 から図 25 は教科書と平行し宿題として課された自習課題に関するものである。自習課題は新カリキュラムの大きな特徴の一つで、課題書の本文を音読し、レポート用紙に書き写して提出することが求められる。図 23 のように、法学部や経済学部では音読を課すことに対して批判的な意見が多い。課題書の書き写し課題は、図 24 から圧倒的に評判が悪いことが分かる。図 25 に見られるように、このような自習課題は2年生ではもうご免だというのが大多数の意見である。制度上 2 単位に見合う学習を確保するための方策として、教室では扱わない自習課題であるが、より一層の学生への説明が求められていると言えそうである。

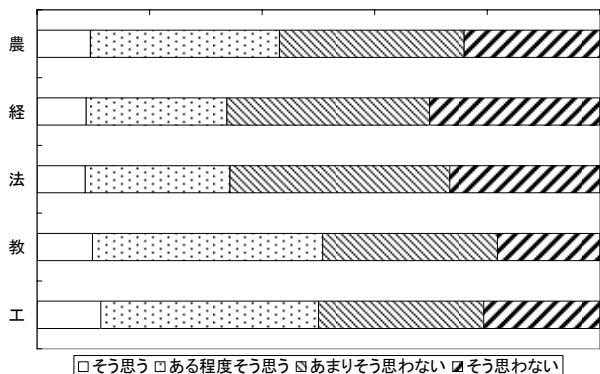


図 23 自習課題(「ぜったい音読」)の音読課題は、英語力を高めるという点で、役に立ったと思いますか

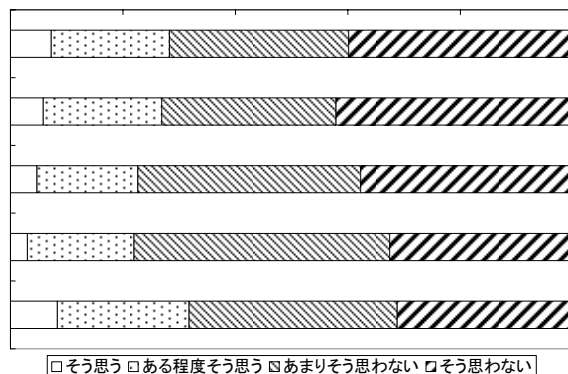


図 24 自習課題(「ぜったい音読」)の書き写し課題は、英語力を高めるという点で、役に立ったと思いますか

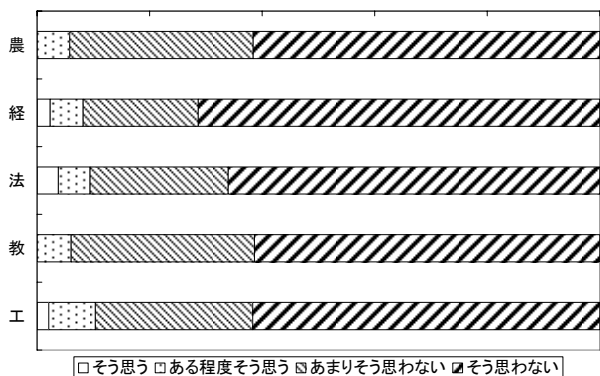


図 25 自習課題(「ぜったい音読」)を2年生でも行うべきだと思いますか

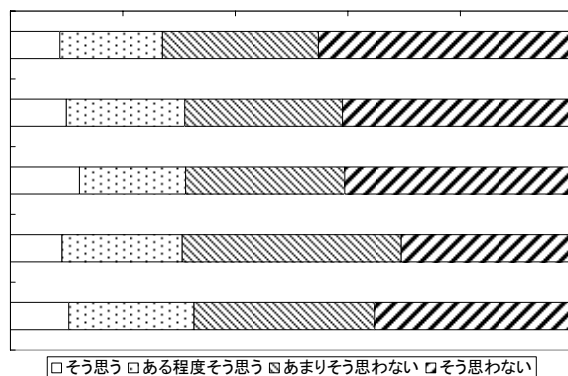


図 26 2年生でも TOEIC テストを全員で団体受験したいと思いますか

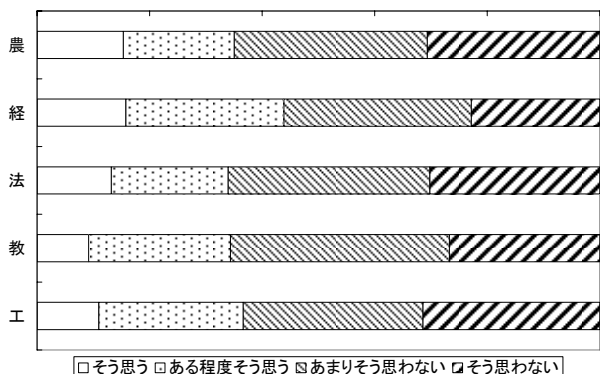


図 27 2年生では TOEIC テストを個人で受験したいと思いますか

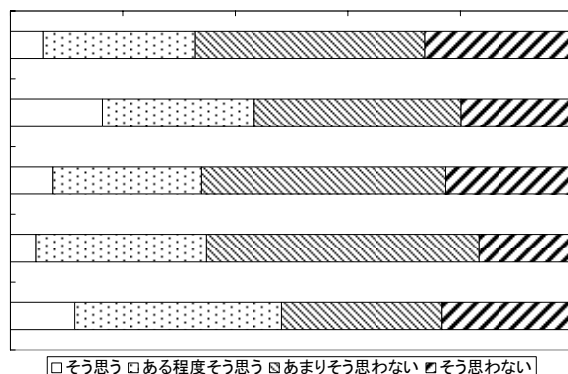


図 28 2年生の授業(LR 演習や SW 演習)も TOEIC テストに対応した内容にすべきだと思いますか

新カリキュラムでは2年次で自分の希望の内容を持った授業を選択できるようになっている。当然 TOEIC は扱わない授業が多いのであるが、そのことについては図 29 や図 30 で分かるように、概ね好評である。4 年一貫して TOEIC を中心としたカリキュラムを組んではどうかとの意見があるが、現行の「1 年では TOEIC」「2 年では分野別に選択」システムは学生の支持を得ていると考えられる。

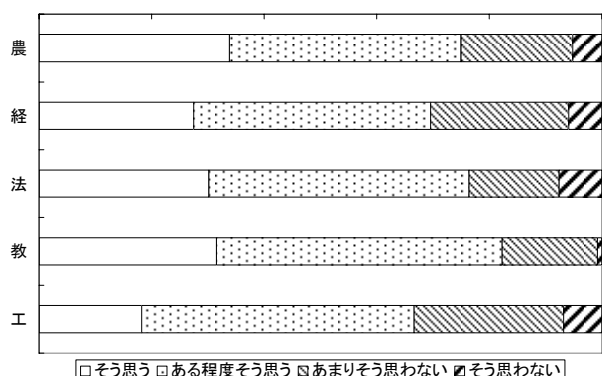


図 29 2年生の授業(LR 演習や SW 演習)は TOEIC テスト以外の内容で良いと思いますか

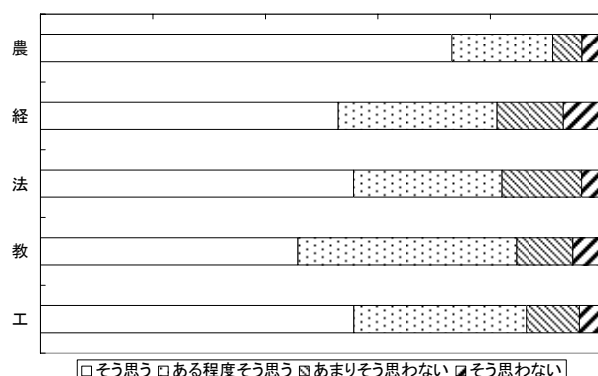


図 30 2年生の授業(LR 演習や SW 演習)が自由に選択できるようになっていることは良いことだと思いますか？

図 31 は習熟度別のクラス編成への希望を問うたものである。経済学部や法学部でやや希望者の方が多い程度で、むしろ意見は割れていると見る方が良いだろう。図 31 の回答を学生の自己申告スコア別に集計し直し、低スコア層(300 点以下)と高スコア層(500 点以上)の意見としてまとめたのが図 32 である。グラフ内の数値は該当する学生数を示す。図 32 から、習熟度別クラス編成を望んでいるのは低スコア層であることが明らかである。高スコア層が授業に期待しない冷めた様子と、低スコア層の授業について行けない苦しみが見えてくるグラフではないだろうか。

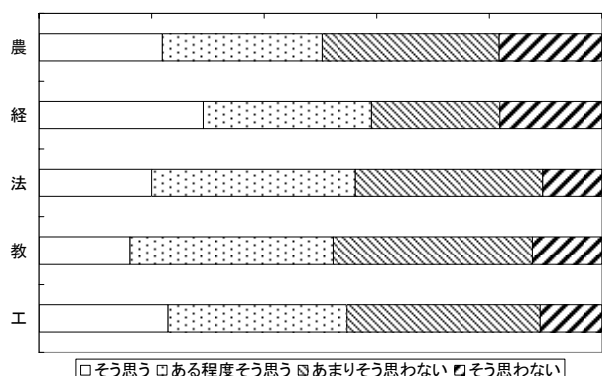


図 31 TOEIC スコアの結果などで、2年生の授業を「上級・中級・初級」などのような到達度別に分けるべきだと思いますか？

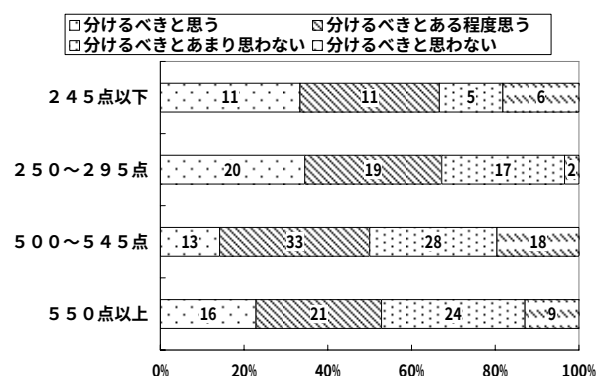


図 32 図 31 を全学部のスコア別に分類したもの

新カリキュラムでは3年生用科目として「上級英語Ⅰ」「同Ⅱ」が幸町で開講されているが、外国人教員担当で受講者が20名程度に限られる。もし全員受講できるようになればどうするかを尋ねたのが図 33 である。ここでも法学部生のクールな視点が読み取れる。図 33 の回答を再び学生の自己申告スコア別に集計し直し、低スコア層(300 点以下)と高スコア層(500 点以上)の意見としてまとめたものが図 34 である。習熟度別編成の希望を尋ねた図 32 と異なり、低スコア層の希望は少ない。英語の勉強から早く解放されたいということであろうか。一方高スコア層での強い希望は現行の「上級英語」の履修者数とほぼ一致しており、うまく収まっているという印象である。図 35 は将来に関する質問であるが、平均スコアとの関連が見られず、概して、できれば英語を避けたいという傾向が強いように思われる。

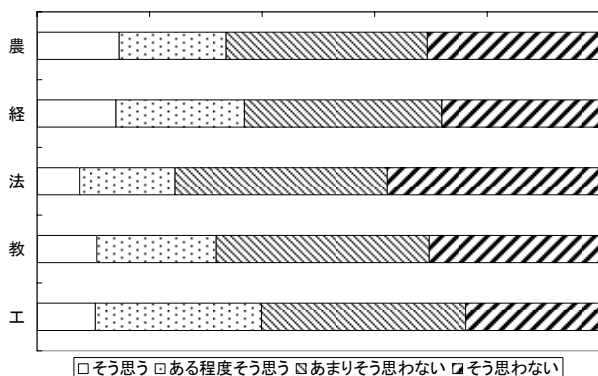


図 33 3年次以降で英語を履修したいと思いますか

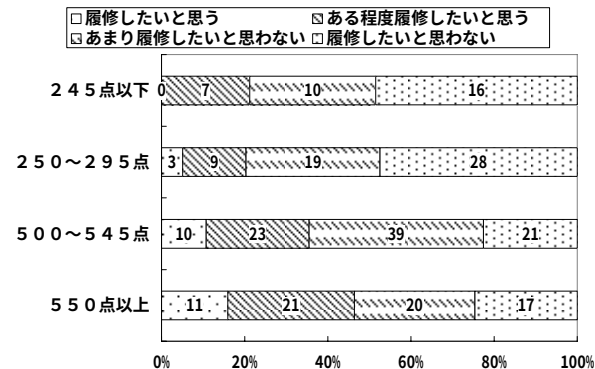


図 34 図 33 を全学部のスコープ別に分類したもの

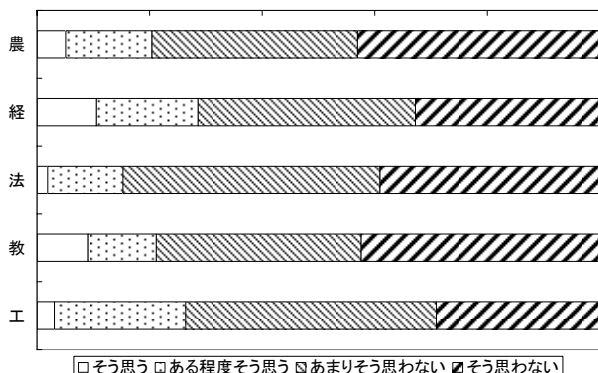


図 35 就職する際には英語を使う職業を選びたいと思いますか

4. おわりに

本稿ではまず、2005 年度新カリキュラムから全学部を導入された TOEIC について、実施根拠と実施体制の紹介した。次にその結果を学部別に俯瞰し、学部間の比較、公開テストとの比較等を行った。さらに 2005 年 7 月と 12 月の比較をするための手法について検討し、一つの例を提示した。

後半では学生の意見を聞くため 2006 年 10 月に 2 年生全員に対して実施したアンケート調査の結果を報告した。結果から、概ね TOEIC は役立つと認識されていること、授業の教科書以外では勉強しないこと、自習課題への評価は低いこと、2 年生で英語科目が内容別に選択できる現行方式への支持が高いこと、低スコア層で習熟度別クラス編成への希望があること、3 年以降での英語履修希望は高スコア層の一部に限られること等が明らかとなった。

外国語教育、特に実践的コミュニケーション能力の充実は、本学中期目標にも明記される重要課題である。その評価の要として TOEIC は大きな役割を担っており、データの正しい解釈と有効な利用が求められている。大学教育センター外国語教育部はその中心的役割を果たすため、より一層の人的・経済的充実をしていくことが何よりも必要だと考えられる。

謝辞

アンケート調査の実施にあたり、平成 18 年度特定施策推進経費(教育改革等推進経費)(第 17 号)の補助を受け A4 対応 OMR を導入しました。また、調査項目検討時には田村外国語教育部長、松島英語小部会長から有益なコメントをいただきました。改めてお礼申し上げます。

参考文献

- ETS. (1998). *TOEIC Technical Manual*. Princeton: Educational Testing Service.
- ETS. (2006). *TOEIC テスト DATA & ANALYSIS 2005*. Princeton: Educational Testing Service.
- IIBC. (2006a). *TOEIC テストとは*
The Institute for International Business Communication, Japan. Retrieved 21 December 2006 from <http://www.toeic.or.jp/toeic/about/index.html>

IIBC. (2006b). これまでの TOEIC 公開テストの平均スコア

The Institute for International Business Communication, Japan. Retrieved 20 December 2006 from <http://www.toEIC.or.jp/toEIC/data/data01.html>

芝田征二 (2001) 英語カリキュラム改定と TOEIC 導入の成果 第 83 回 TOEIC 研究会報告書 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会

岡山大学 (2006). TOEIC-IP 実施に係る他大学照会事項報告

永尾智 (2003). 英語授業の更なる質的改善へ向けて 香川大学教養教育研究, 8, 51-63.

松島欣哉 (2006). 2006 年 12 月副学長宛英語小部会長回答